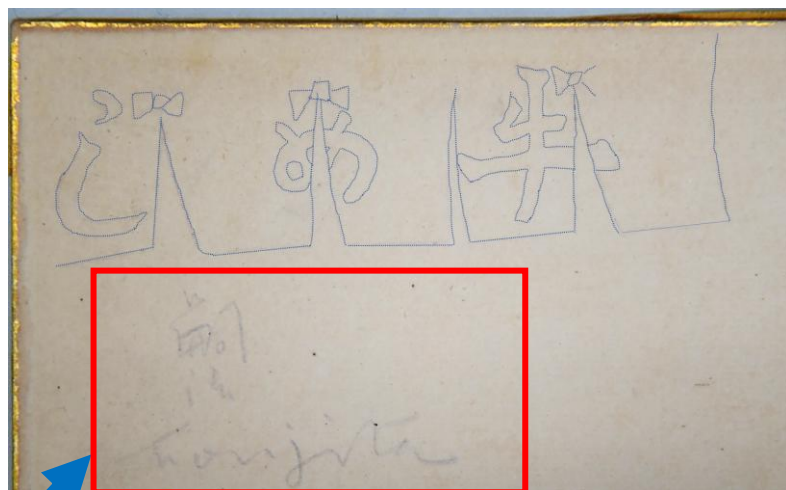


新発見！藤田嗣治と国吉康雄が寄せ書きした色紙
特別展「藤田嗣治×国吉康雄：
二人の平行・キャリアー百年目の再会」で初公開
2025年6月14日（土）～8月17日（日）／兵庫県立美術館

兵庫県立美術館は、6月14日（土）～8月17日（日）の会期で開催する特別展「藤田嗣治×国吉康雄：二人の平行・キャリアー百年目の再会」において、本展開催にあたっての調査の中で新しく発見された、**藤田嗣治と国吉康雄が寄せ書きした色紙を初公開**します。これまで藤田と国吉の出会いを示す資料はほとんど見つかっていませんでしたが、1930年のニューヨークでの直接交流を示すこの色紙は、2人の和やかな関係性を示す「新資料」です。概要は、以下の通りです。

作品（資料）について

作家名：国吉康雄、近藤赤彦、藤田嗣治
制作年：1930年
形状：色紙
所蔵先：トム&シェリル・ウルフ氏



赤枠の中に、藤田嗣治のサイン
嗣治 Foujita の文字が見える



藤田嗣治と国吉康雄が寄せ書きした色紙（以降、色紙と表記）は、1930年11月にニューヨークで描かれて以来、ニューヨーク周辺に保管されていた作品（資料）で、これまで公に存在を知られていませんでした。

色紙は、2023年5月頃に、国吉研究者のバード大学名誉教授、トム・ウルフ氏が入手しました（旧蔵者は、1940年代に、国吉に師事していた女性美術家の縁者）。トム・ウルフ教授の入手時には、牛が2匹描かれた国吉関連のドローイングという認識でしたが、展覧会に向けた調査の中で、日本人研究者の尽力により色紙裏面の書き込みが解読され、1930年11月、「紐育日本美術家協会」主催の藤田の歓迎会での寄せ書き（席画）であることが確認されました。

中央に国吉が描いた雌牛、その下に日本画家・近藤赤彦が描いた後ろ向きの雄牛が目視できますが、色紙を再確認したところ、表面上部に藤田のサインと線描の痕跡を確認しました。今年4月末に、ニューヨークから兵庫県立美術館に色紙が届き、さらなる調査を実施。その結果、残された線描は、藤田のイラストであることが判明しました。サインとイラストが見えづらくなっている原因は人為的に消されたものでなく、退色であることが保存修復担当学芸員による調査で分かりました。青系の色鉛筆または当時市販が始まっていたシャープペンシルで描いた可能性があります。イラストに描かれているのは「牛めし」と書かれた暖簾（のれん）。牛たちの運命を表現したものなのか、藤田らしい機知を感じさせると同時に、歓迎会の和やかさが感じ取れます。

これまで藤田と国吉の出会いを示す資料はほとんど見つかっていませんでしたが、1930年11月のニューヨークでの直接交流を示すこの色紙は、2人の和やかな関係性を示す資料として、本展覧会で初公開します。

本展監修者・兵庫県立美術館館長 林洋子 コメント

この色紙は小さいけれど、今回の展覧会一連の調査のなかでみつかった、最大の、最良の「新資料」です。この度、関係者のご協力でこの色紙を本展で展示できることをたいへんうれしく思っています。この展覧会がなければ、この色紙は国吉と近藤赤彦二人の合作ということで、歴史のクレパスに沈んでいたことでしょう。

藤田と国吉については、さまざまな「風評」「ゴシップ」があります。今回、われらはそこにしばられず、作品を向かい合わせることを目指しましたが、「美術館での展覧会」としてしっかり周辺資料の調査を行いました。当時の雑誌・新聞、本人関係のアーカイブ（日記、手紙、写真など）、日本国内は当然ですが、藤田のものは一部フランスに、国吉の大半はアメリカにあります。直接調べたものもあれば、21世紀以降デジタル公開がすすみ、われらはその恩恵を存分に受けることができました。われらは特定の声ではなく、複数の声、資料をつきあわせることで、どこに真実があるのかを探し続けました。

そうした地を這うような地道な作業の果てに、この色紙に出会い、とはいえ当初はわれらはその意味を十分に読み取ることができませんでした。現物が届いた4月末にようやく、確信を持ちました。1930年11月18日、藤田と国吉はニューヨークでたいへん和やかな時間を持つことができた。最後に読み取った暖簾上の「牛めし」の文字に、われらのこの数年のリサーチは報われたといえましょう。展示室では小さな存在ですが、会場映像やパネル、カタログとあわせてご覧いただけますように！

《 報道関係者お問い合わせ先 》

「藤田嗣治×国吉康雄」PR事務局（株式会社TMオフィス内）担当：馬場・永井・西坂

TEL：090-6065-0063（馬場）090-5667-3041（永井）

テレフォンセンター：050-1807-2919 FAX：050-1722-9032 E-MAIL：fk2025@tm-office.co.jp